

出身地 栃木県足利市
 生年 一八七〇（明治三）年八月二十二日
 没年 一九二五（大正十四）年二月四日

「白雲なびく駿河台……」で始まる明治大学校歌の作詞者として有名な児玉花外によって「関東血の花 横田法相」とうたわれた立憲政友会の代議士横田千之助は、本学出身の学員として初の国務大臣となった人物である。

横田は一八七〇（明治三）年、栃木県足利市に生まれた。生家は江戸時代、代々名主を務めた富裕な家であった。しかし、父市太郎が生糸相場で失敗したため、累代の家屋敷を手放し、生活は一転して貧窮を極め、千之助は染物屋に丁稚奉公に出されるなどの辛酸をなめることとなった。

彼はこのような生活から抜け出すために単身上京し、新聞配達をして自活を始めた。一時、軍人を志したり小説家に憧れた時期もあったが、九〇年、新聞の「書生入用」広告が縁となって星亨の書生となった。千之助二十歳のことであった。

凶刃に倒れると、弁護士から代議士への転身をはかり、一二年五月の第一一回衆議院議員選挙に郷里栃木県郡部から立候補して当選、立憲政友会の代議士となった。

以後二四年まで連続五回当選を果たし、その間、政友会総裁原敬に政治的手腕をかわれ、一四年に政友会幹事長、一八年の原敬内閣時には法制局長官に抜擢され、高橋是清政友会総裁のもとでも第二次護憲運動を推進する原動力となった。

その後、二四年の総選挙で護憲三派が圧勝し、加藤高明内閣が成立すると、横田は政友会を代表して司法大臣に就任した。「横千」のニックネームで親しまれ、普通選挙の実施と貴族院改革に精力を傾けた、東京法学院出



横田千之助（1915年頃）

身の国務大臣が誕生したのである。横田の入閣は、中央大学にとって

星は、横田の志望が弁護士であることを知ると東京法学院に入ることをすすめた。英国留学の経験もち、司法省付属代言人を務めたこともある星は、東京法学院が英国のミドルテンブルで英法を学んだ穂積陳重、岡村輝彦、増島六一郎らが創立した学校であるということや、同校の建学の旨趣が「法律の実地応用」であることを十分承知していたのであろう。

東京法学院に入学した横田は邦語法学科に籍を置いて勉学に励み、二年生の時に優等生の一人に選ばれ褒賞を受けている。さらに、在学中の九三年二月にはみごとに代言人試験に合格し、同年七月に東京法学院を卒業した。

弁護士となった横田は星法律事務所の一員となり、三年後の九六年、星亨が駐米公使としてワシントンに赴任すると、星に代わって法律事務所の一切を任されるほどになっていた。しかし、一九〇一年、星が伊庭壮太郎の

もたいへん喜ばしい出来事であった。学員会主催の祝賀会が上野精養軒で盛大に催され、創立者元田肇や岡野敬次郎学長をはじめ二五〇人の学員が祝賀にかけつけた。その席上、学員会を代表して挨拶に立ったト部喜太郎は、「今回横田千之助君が率先して司法大臣に親任せられたるは実に我大学出身者より大臣に親任せられたる元祖であります開山であります、即ち横田君は我中央大学出身の同輩及後進の為に新たに大臣道を開拓したる殊勲者であります」と述べた上で、貧窮から身をおこし、奮闘努力の結果功なつた横田を学生の模範であると称賛した。

しかし、祝賀会に集まった学員の気持ちとは裏腹に、横田千之助は大臣就任後わずか七ヵ月余にして急逝した。享年五十五歳であった。横田の早すぎる死を悼む声は学員、政界に限らず各界から寄せられた。そして、政党政治の実現に向けられた彼の理想は昭和政治に受け継がれていく。しかしながら戦前期における政治過程は、軍部の台頭とともに「横千」の理想を打ち砕いたのである。